

——「思い出の納豆豪華ごはん・貧乏母さん、快進撃（心がほっとするいい話）」より——

大津さんは、自身が36歳、息子さんが9歳のときに離婚しました。

でも、彼女は楽観的だったといいます。それまで、どんなことをしても結果を出して、仕事上でも成績をあげてきていたからでした。しかし、すぐに「壁」にぶち当たります。

就職の面接に行くと、必ずといっていいほど、こんなことをたずねられました。

「あなたには、小さい子どもがいるんですね」「子どもになにかあったとき、預ける所はありますか？」

そのとき初めて、小さな子どもをひとりで育てているということ自体が、仕事をするうえで大きなハンディキャップになっていることに気づかされたといいます。

正規雇用どころか、アルバイトの面接でも、シングルマザーだというだけで通りません。

ようやくありつけた時給800円のアルバイトも、子育てとの両立のために働く時間が制約されて、手取りは5～6万円しかありません。そのうえ、交通費が一部しか支給されなかったので、自宅から徒歩で1時間くらいかけて通ったそうです。

期待していた母子家庭の自立支援給付金を役所に申請に行くと、給付金がもらえないことがわかり、がく然とします。なぜかという、給付金は、前年の所得に応じて支給されるからです。離婚した夫の会社で、役員をしていたからでした。それだけではありません。税金、年金、健康保険の請求……。

大津さんは、シングルになったとたん、^{がけ}崖から突き落とされるがごとく、一気に「貧困」におちいりました。

お金がないので、スーパーで廃棄処分ぎりぎりの食品を買います。

そんななか、30円に値下げされている納豆は大ご馳走でした。息子さんと、1パックの納豆を半分にわけ合って食べます。ふたりで、「納豆豪華ごはん」と名づけていたそうです。

「白いごはんに、納豆は美味しいですね」と言うと、

「いいえ、お米なんて買えませんでした。ただの納豆だけです」といわれ、あ然。

「でも、29円のモヤシが10円に値下げされていることがあるのです。モヤシのためのうえに納豆をのせて食べられる日もありました」と言います。

このように、ふたりは毎日の食事にも困ってしまうような生活でした。

ある日、息子さんに言われました。

「お母さん、笑って」 ショックでした。息子さんにはよほどつらそうに見えたのでしょう。

そこで、一生懸命笑おうとしました。でも「笑えない」のです。

(このままじゃダメだ、このままじゃ、ダメ……)大津さんは決意します。

「今のままでは、愛する息子になにもしてやれない。高校にも行かせてやれない。10年後のことを考えよう。息子とともに幸せになる未来を描きたい」

そして、「そうじ」や「片づけ」などを行う家事代行業を起業します。

事務所を借りるために不動産屋さんをたずね、またまたがく然とします。どこも貸してくれないのです。

まず、「保証人をつけてください」と言われます。

「シングルマザーはヤクザと同じだ」とも。たぶん、家賃の未払いの人が多くて敬遠されていたのでしょう。



なかには、こんなひどいことをいう人も。「オレの女になるんだったらいいよ」
大津さんは絶望のふちで途方にくれました。しかし、救う神が現れたのです。
ある不動産屋さんをたずねたとき、窓口の女性と話をしていると、彼女もシングルマザーだということです。
彼女が、上司に進言してくれ、住宅地のまん中にあるアパートを事務所として借りることができました。

友人に「これから、こんな仕事を始めるのよ」とプレゼンをして、もしもそうじや片付けに困っている人がいたら紹介して！と頼みまくりました。

すると、少しずつ、ハウスクリーニングや家事代行の仕事が入づてに増えていきました。
スタッフも雇いましたが、もちろん、自分自身が一番、猛烈に働きました。朝から晩まで、身を粉にして。
しかし、夜遅くになっても帰らない母親に、息子さんはひとりアパートでさみしい思いをしていました。
うれしいことも、悲しいことも、つらいことも、たったひとりですごして、解決していきました。

大津さんは、息子が片親になった事で嫌な思いをしないようにと、担任の先生に、
「離婚したことを、わからないようにしてください」とお願いしました。
しかし、あるときの保護者会で、担任の先生にこんなことを言われてしまったのです。
息子が友だちとやんちゃなことをした際に、
「片親だから、保護者の目が届かないからそのような行動に出るのよ」
みんなの前です。もう涙を通り越し、ショックで押しつぶされそうでした。



大津さんは、がむしゃらに働きました。働いても働いても「貧困」から抜け出せません。
起業して半年がたったある日のこと、大津さんの体に異変が生じます。突然、体の震えが止まらなくなってしまったのです。過労と栄養失調が原因でした。

そんななか、母親が、大津さんの体調の異変に気付きました。
「“できる子”に生んだんだから、あなたならできる」スツと茶封筒を差し出しました。その中には200万円の現金が入っていました。

そのお金で、都心の名古屋駅に事務所を移転します。

すると、あら不思議。次々に大手企業から仕事が舞いこみました。
名古屋駅前の一等地という立地が、想像を超える「信用」を生んだのです。

なかには、トヨタ自動車の販売店で講師の仕事をしていただくこともありました。先方は、大津さんの講義に大満足！そのうわさを聞いて他の会社も依頼して下さるようになったのです。

そこから、大津さんの快進撃が始まりました。急成長をとげ東京進出も果たし、関連会社は4社となり、スタッフも百数十名に増えました。そうじや片づけについての多数の書籍を出版し、ひんぱんにテレビにも出演しています。あの苦しい「貧困」から抜け出したのです。

本人の頑張りもさることながら、母親の「愛」のおかげでした。母は偉大です。

2016年、大津さんは貧困に苦しむシングルマザーを支援する会社((株)リンクリンク)を立ち上げました。「小さな子どもが、私の息子のようにひとりぼっちですごすことがないような社会にしたい」自分がつらかったから、同じ境遇の人たちを応援したい。そんな大津たまみさんの「生き方」に心打たれました。

